

# 特集

## 「子どもの成長」と「子育て」を地域社会で支えあう“まちづくり” ～「子育て日本一を実感できるまち」の実現を目指して～ 身近な地域で頑張っている素敵なお人をご紹介します

北九州市では「子育て日本一を実感できるまち」を目指して、さまざまな施策をすすめている。しかし、その施策を実際に体験するのは市民である。市民が自らの力で家庭や地域において、子育てしやすい環境にしようと思い行動しなければ、施策は無意味なものになってしまう。地域で、まさに自らの力で特色のある子育て支援活動を積極的に行っている人はたくさんいる。今回、8名のみなさんを取材させていただいた。個性的で人間味あふれる北九州市民の力を紹介する。



# 地域で子育てができる地域づくりを

水野 圭子さん



■水野 圭子

小倉南区民生委員主任児童委員 / 葛原校区まちづくり協議会事務局長 / 葛原校区葛原大阪町内会 会長

民生委員、葛原校区まちづくり協議会事務局長、葛原大阪町内会会長と地域のまちづくりに奮闘されている水野さん。地域ならではの力を貸してくれる。「今の若い人たちには町内会に入ることもなく何でも各自でやっていて子育てに関してもそう。このままだと子育てについて分からぬことがあっても誰に聞くこともできない。親が地域とのつながりがあると、子どもも自然に地域とつながり、行事にも参加するようになると地域の大人が子どもをほめたり注意してくれたり、もっと親密になれば困った時に近所の方に助けたり助けられたりすることが日常になる。地域で地域の子どもたちを育てていく、大きくなつて郷里に帰りたいなあと思えるような地域づくりが大切だと思う。」と語る水野さんは地域の行事などにできるだけ参加してくれるよう毎日働きかけをしている。

中学校給食導入前、水野さんは毎朝、ある中学校で朝食を食べていない子どもたちのために、おにぎりを握って届けていた。その中学校が地域ボランティア推進指定校になっていたこともあり、水野さん自身のお子さんはもう卒業していたが、門立ち活動や見回り活動などをしていた。そんな中、朝ごはんを食べてこない子ども達がいることに

気がついた。「おばちゃんあ～ん、腹減った～、なんか買ってきて。」など子どもはきっと本当に買ってきて欲しかったのではないだろうが、水野さんに声をかけてくる。「買って行くっていうのもどうかと思っておにぎりを作っていくことにしたんよ。」なぜ朝ごはんを食べてこないか聞くと、親が作ってくれないと、夜型で朝起きられずご飯を食べる時間がないと子どもたちは言う。なぜ自分の子どもではない他人の子どもにそこまでできるのか。「親ができないことはしてあげようと。子どもは大人にしてもらったことしか、自分の子どもにはできないから。できることはしてあげたいんです。子どもたちが大人になったときに『昔、何かおにぎりを配ってくれるおばちゃんいたよねえ』って思ってくれるだけで嬉しい。」ある方からは「水野さん、そんなことしても子ども達は当たり前と思ってるやろ。」と言われたこともある。しかし子ども達はおにぎりを渡すと必ず「おばちゃんありがとね。」とお礼を言ってくれる。「今の子は、って色々言われるけど、まだありがとうっていう言葉が出ているときは大丈夫。」と話す水野さんの声は実際に子どもたちにふれあい、目を見て話した体験からか自信が伺えた。

水野さんには壮大な夢がある。「心が疲れていて学校に行けない子ども、おじいちゃん、おばあちゃん、地域の誰でもが集まれる施設を作りたい。学校の近くにあれば、学童ではなくて、その施設で子ども達を迎えることができる。24時間体制で、病院とも提携してお医者さんや看護師さんとも連携が出来る場所。世代間関係なく誰でも気軽に立ち寄れる場所を作りたい。」そんな話を地域の方にすると手伝うよと言ってくれる方もいる。「退職した年配の方たちに手伝ってもらえたらしいと思う。そういう場所に行けば必ず何らかの役割が一人ひとりに出来てくる。そうなればその方たちの生き甲斐にもなるんよ。異世代で地域の様々な人たちが誰でも来られる、ここに来たらほっとするアットホームな場所、そんな場所を作りたいと思う。」

自分の子どもでもない、何の見返りも求めず他人の子どもにおにぎりを握ってあげられる水野さん。水野さんにとっては他人の子どもではない『地域の子ども』なのだ。昔はそれが当たり前だった。今、私たち親は面倒だと地域とのつながりを断ち、自分達だけで子育てをして悩み、苦しんでいる。地域に助けを求めることが、実はそれが一番の解決

策なのかも知れない。困ったときに助けを求めるができる近所づきあい、地域との関係づくりを面倒がらずにしていき、子どもたちが親以外の大人とふれあう事は、子ど

もの育ちにとっても重要である。水野さんの夢が実現することを心の底から願う。

(文・入江 美穂 写真・魚本 藍)

特  
集

## お母さん達の力を社会に活かしたい

北九州ファミリープラスひまわり発起人／専業主夫 小川 真一さん



■小川 真一

北九州ファミリープラスひまわり発起人／専業主夫  
ファミリープラスの活動の他にも北九州 NPO 研究交流会に所属する  
かたわら、小学校での絵本の読み聞かせなど社会活動に奔走している。

取材に伺うと、「記念にどうぞ、珍しいでしようから。」と「専業主夫、小川真一」と書かれた名刺を差し出された。結婚をする際、もともと家事が苦手だった小川さんの奥さんは全国区で転勤を繰り返す国家公務員となり、小川さんは、家庭と「主人」の生活を守る専業主夫となった。専業主夫となった小川さんは、転勤先の名古屋で、「ママさんプラス」という子育て中のお母さんで構成されたプラスバンドに参加したことがきっかけとなって、平日のお昼にお母さん達が活動できる場所を提供したいと考えるようになった。「お母さんが楽しそうにしている家庭は幸せな家庭になる。」それが理由だった。小川さんは、北九州に引っ越してきて、同じような団体に入ろうと思ったがこの街にはなかった。そこで、去年の5月、市民活動サポートセンターの協力の下、「ママが輝けば家族も輝く」というコンセプトのブ

ラスバンド、「北九州ファミリープラスひまわり」を立ち上げた。「プラスバンドでなくても良かったんですが。色々な条件や考えがあつたり、育った環境が違ったとしても音楽を演奏している時っていうのは同じ夢が見られるから。」音楽でみんなが繋がる実感がもてる事を小川さんは知っていた。また、小川さんは、転勤族が地域にとけこむ足がかりになる場にもしたかった。「楽器を吹きたいと思えば、どこ の地域に転勤したとしても受け入れられるというしぐみ作りも意識しています。」と小川さんは語った。しかし、小川さんは、活動を、特別な能力がある人、特殊な条件がある人だけの場にはしたくなかった。根底には、社会奉仕という考え方があった。自分たちが音楽をして地域に還元していく、社会に出て演奏する事で地域に繋がっていき、聴いた人から評価を受けて、お母さんが自分の居場所を見つけていく。人と人が交わるしぐみを沢山作りたい、と小川さんは考えている。小川さんは、プラスバンドのメンバーには必ず係についてもらうことにした。係という名目があると、係の仕事を通じて人と話すきっかけになる。また、楽器パート別でランチ会や集まりがある。そしてそれとは別に、住んでいる地区によって接点を持つ仕組みも作っている。今、小川さんが立ち上げた「ひまわり」は、集まつたお母さんたちが自分たちで考え、自分たちで運営する仕組みができつつあり、親子ふれあいルーム、保育所などの児童関連施設、デイサービスセンターなどの高齢者関連施設、市民センターを中心とした地域施設、および各種イベントなどで演奏を行うなどして、活動の幅は広がりを見せている。小川さんの細かい心配りとお母さん達のパワーがこのプラスバンドの明るく楽しい雰囲気を作り出している。プラスバンドは1つの社会インフラだと小川さんは言う。「子育て中だからこそ社会とつながれることがある」子育てをするお母さん達がこのプラスバンドがある限り、社会との接点が続いていく仕組みを作りたかったと小川さんは語る。お母さん達が潜在的にもっているスキルやパワーを眠

らせておくのはもったいない。そんなお母さん達を活かしたい。「単純にもったいないと思う。宝が眠っているという意識がとてもある。お母さん達のパワーを地域のための力に変えられたらこの街は良くなる。」小川さん自身が専業主夫になって感じた事だ。そして小川さんはさらに続けた。「プラスバンドというきっかけを作った僕がすごいとかではなく、僕が最初に手を挙げた時に地域の方がパッと集まってきてく

れた事がすごい。それが地域が持っている潜在的な力だと思います。」女性が社会に出るという選択肢が普通になった昨今、小川さんの様な専業主夫という形も当たり前な事。そして小川さんのように地域を盛り上げてくれる存在が必要な時代になってきている。

(文・写真 魚本 藍)



## 大好きな絵本と子どもたち

おはなしボランティア すぎのこ 代表 杉山 英子さん



■杉山 英子

おはなしボランティアすぎのこ代表 / 手づくり布のボランティア  
長月の会 代表 / 紙芝居 文化の会 会員

元々市の職員だった杉山さんは16年前八幡図書館に配属され、図書館が指定管理になると、中央図書館に移り事務員として4年間働いた。図書館で働くうちに、絵本の世界に魅せられ入り込んでいった。現在、「お話ボランティアすぎのこ」と「長月の会」で活動している。「子どもとは縁が切れないんです。」と杉山さんは言う。今は杉山さんが自分が布で作った絵本や紙芝居を持って子ども達がいる幼稚園やイベントに行き子ども達に本の楽しさを伝えたり、時にはお母さん達に布絵本の作り方を教えている。「ごめんねってジュース1本しか出せんのよと言われてジュースを1本もらって帰る事もある。でもそれで充分。だって2時間は

子ども達と一緒に大騒ぎして、自分も楽しいし、子どもからもらうものが沢山あるから。」準備も人集めも大変だが楽しい。「お金を頂くのはあまり好きじゃないんです。」そんな杉山さんの活動はほとんどボランティアだ。「最近は何をしても人が集まらないんです。」お母さん達の関心がない事と、心が豊かな生活が出来ていないことを杉山さんは悩んでいる。「できれば3、4歳くらいまではお母さんと一緒に過ごして欲しいと思う。お話会にきて、好き勝手に走り回ったり、大声を出すのは自然な姿だと思うんです。共同生活を送ってきた子ども達はこのような場でも辛抱をしてしまうんです。」杉山さんは今の子ども達と親のあり方に不安を覚えている。お話会の案内を渡しても、お母さん達は子どもを預かってもらえる場所だと勘違いをする事が多い。親が子どもと一緒にお話に接する事が大切だ。しかし現実は、お話会の様な場所に子どもと来るお母さん達は減ってきている。「今の若者はって思うけれど、お母さん達を育てたのは私たち世代なんです。育てられた子ども達の責任はその親にある。だから私は今のお母さん達を見て、育て方を間違えたかなと私自身が反省せないかんと思う。」「今、歴史の本が漫画になって出版されているんですよ。子ども達は物語の背景が自分たちの生活と違うから文章だけだと思い描けないみたいです。楽しくなるきっかけになるから漫画から入りって言うんです。もし子ども達がその本に関心を持ったらその先を読みたくなる。しかし、お母さん達に漫画を勧めると、漫画なんかと断られる。お母さん達は自分で手をかける事はしないけど、望んでいるものはものすごく高い所にある。」今年、杉山さんは、子育てふれあい交流プラザで毎年開かれるイベント、絵本カーニバルに子どもシアターという子ども達が演じる場所、絵本の入り

口になる所を作った。いつも聞く側の子ども達、人前で本を読むという事は子どもにとって凄く嬉しい事だ。杉山さんは子ども達が辛抱する時間ではなく大人達が聞くという形を取った。今回の子どもシアターは本当によかったですと杉山さんは語った。「お口はチャック、手はお膝じゃなくって自由でいいやん。」子供達は正直だ。「子どもはある程度の年になると嫌でも枠の中に入る事になる、せめてそれまでは子どもの好きなように自然でいさせてあげたい。」と杉山

さんは言う。「この年になると体が思うように動かないんですよ。それでも動き回る。私はよくロボットじゃないかって言われるんです。ロボットって言わされたらそうかも分からんね、人間には出来んかもしれんねって思う。」と笑顔で話す杉山さん。今この北九州にこんなに暖かいロボットは何人いるのだろうか。今日も子ども達のためにと絵本を持って走り続けている。

(文・写真 魚本 藍)

特

集

## 苦労をかき消してしまう、子どもたちのパワー。

清水学童クラブ主任指導員 阿部 和子さん



平成8年2月に設立された清水学童クラブの運営を、何の知識もないままスタートしたという阿部さん。当初10人集まればいいだろうと考えていたが、集まったのは何と30人。今では100人を超える大きな学童クラブとなり、現在清水小学校原町門近くに施設の建て替え中。2010年11月には新施設が完成する。

「昔、幼稚園に勤めていた事もあって、地域の方に学童をやってもらえんやろうかと頼まれて…。」阿部さんは子育てに一息ついた48歳。分からない事だらけのスタートだった。「幼稚園児とは違うし2～3年間は手探りの状態。1人で過去の経験を思い出しながらやっていました。」苦労は現在も進行形だと語る阿部さんの悩みは、やはり資金面。「今は人数が多くなったからやっていけてますが、それまでは自己

資金で立て替え。補助が出るまでのつなぎをしなければなりません。小さな学童保育をされている所は、皆同じ。最近まで、私も中小企業の社長さんみたいに給料日が近づくとドキドキでした。だから家族には迷惑をかけました。」それでも約15年にわたって運営を継続するのには理由があった。「子どもが大好きなんです。年々大変なことが増えていくことは確かですけどね。」とほほ笑む顔に、親として安心感を覚えた。

### 昨今の子どもたちの変化

継続できたのは、子ども達の元気な笑顔のお陰という阿部さん。しかし、最近の子どもたちが昔に比べて随分変化してきている事に、不安を感じている。「話が全然聞けないんですね。今はそこがすごく苦労している点です。情緒的に不安定な子は、友達にあたったりとか色々あります。それを他の子どもにどう分からせるかっていうのが難しい。これから先、学童にも専門の先生が1人入ってくれば強く感じます。私たちは手探りで未だに勉強中なので、専門知識にも限界があります。こういう風に言えばよかったですとか、あとで後悔することもあります。」学童保育においても、全児童化を機に、小学校同様の現象が起こっているのは当然のことである。様々な課題を抱える子どもたちを育むという視点から、専門家による研修や相談業務が行われてきたが、今後、一層の支援策を講ずることこそ、行政の課題であると感じる。

また、学童自体でも新たな試みを考えている。学童クラブの1つの良さは子どもたちの縦関係。人数が多くなって、ここ数年は実施できていなかった縦割りクラスを再開する構想がある。「3クラスぐらいに縦割りに分けて、子ども達

の様子を見ながら、実施してみようと思います。お姉ちゃんやお兄ちゃんが面倒をみるのも学童の良さですし。」家庭と学童の関係にも問題点はある。「辞めた子どもが、マンションのロビーでゲームをしているのを見かけると本当に心配になります。遊びにきていいのよ、一緒に遊ぼうよって言ったら、その子が友達を連れて週に一回くらい来るようになったんですね。どうして学童やめたんだろうって。悲しくなりました。」

北九州市は、近隣の都市などと比較しても、学童の整備は進んでいる。進んでいるからこそ抱える新たな問題には、

参考例も少なく、先生たちの苦労も大きい。先生、保護者、地域、行政とがひとつになって、解決していくなければならない。学童保育は、放課後子どもを預かってくれる場所。そんな単純な思いがあったが、取材を通じて阿部さんたちの活動は、保護者と子どもの心に寄り添い、学校と家庭との隙間の時間を埋める、子どもにとっては、もしかしたらとても大切な時間を共有してくれる先生たちなのかも知れないと感じた。そして私たち大人が見失ってはいけないのは、「子どもの心」であることも再認識した。

(文・谷 美紀 写真・魚本 藍)

## 結果ではなく過程を大事にする子育てを

さと子の日記広場 鍬塚 聰子さん



■鍬塚 聰子

元中学校教諭。長女の通う塾で講師を始めたことがきっかけで文章力の低下に不安を感じ、戸畠区の自宅でさと子の日記広場を始める。現在、活動は16年目。

子ども達が日記をつける事が文章を書く事に繋がると思つて始めた「さと子の日記広場」。文章を書くには何かを思つたり、感じなければ書けないという事に気づいた。感じるためには子どもが疑問を持ったり、感じる心があればいいと思い、そういう事を感じられる場にしたいと思い、1995年3月31日から始まったさと子さんの活動は今年で15年が経つ。今も週に1回、さと子さんの自宅で子ども達

と日記を書いたり、月に1回のお誕生日会を開いている。子ども達の年齢は様々で、一番上は中学生から下は3歳。十数人の子どもが来ている。「みんなここに来たら家族。食べる事もみんなの健康のため。タマネギや人参を入れたスープをみんなで味見して作ったり『お塩はこのくらいでいい?もうちょっと?』とみんなで話しながら調理する。お誕生日会の前はお掃除をしたり、その時に誰が一番雑巾を絞れるかって雑巾絞りチャンピオンを決めようって言ってみんなで盛り上がるんですよ。」とさと子さんは笑顔で語った。さと子さんは塾の講師をしていた。「3年生を受け持った時に、作文を書かせるといや~な顔をするんです。そのいや~な顔が嫌で、何とかいい方法がないかしらと思った。小さな時に書くのが楽しいと思えば、そんなにいや~な顔をしなくて済むんじゃないかなと思って。」日記教室、「さと子の日記広場」の誕生である。

4年前、絵本講師の資格を取った時、読書感想文の弊害に気がついたという。「本を読んで、面白いって思ってすぐ文章になる訳がないし、そんなに難しい事をなんでさせるんだろう。」確かに半強制的に読書感想文を書くという課題がなければ、本を読む事や書くということに子ども達が嫌悪感を抱かなくて済むのかもしれない。家に帰る時、子ども達に日記を書く紙を渡す。来週までの1週間分の紙ではなく、たった2、3枚の紙だ。「嬉しかったり心が弾んだら言葉が自然と出てくるもの。自然な言葉、自然な想いが大切。」とさと子さんは語る。15年前に日記広場に來ていた子ども達と今の子ども達はちょっと違つてきているとさと

子さんは言う。「言葉が素通りするんです。1人に言えば伝わるんだけど、みんなに向かって言った時には自分に言われているんじゃないっていう聞き方をしている子どもが増えていて、それが凄く怖いんです。子ども達はそれを故意にしているわけではなく、言葉がすっと耳に入ってるんですね。」大人数の学校ではどうなっているのかと不安を感じる。そして、今の子どもたちは自分に自信がないとさと子さんは続けて指摘した。「そこに至るまでのプロセス、その子がどんな力を出してどんな風にやったのかという所を見さえすれば結果は要らない。クラスで何番だったっていうのは結果にしかすぎなくて、その子がどんな過程でどれくらいの事をしたのかという事を親がしっかり見て認めてあげることが大切。もっと子どもが自信を持っていいはず。」形のある結果があると安心する親、それに比例して親の顔色を伺う子ども達が増えている。「自分が産んだ子を信

じる、自分の子を信じる。自分の事も信じる。そういうものを親が持てば子どもはもっと生き生きする。」

最後に、さと子さんがこの活動をされている原動力を伺うと「子どもと接する事や話をする事が楽しい。子どもの色々な発見とか、自分が気づかなかつた見方を教えてくれる。子どもと接する事が私の原動力です。」と語ってくれた。

昔は、近所にさと子さんのような存在がたくさんいたはず。親は外に働きに出て、忙しいからと子どもに家でゲームを与える。確かに今の時代は忙しく、子どもと目を見て話をする事すら難しくなってきているのかも知れない。その中でさと子さんの様な存在は暖かく心強い。子ども達と1対1で話をし、子どもの素直な気持ちにしっかりと耳を傾けることが、その子たちの未来にとってどんなに大切な事なのかさと子さんは分かっているのだろう。

(文・写真 魚本 藍)

## 「子育てに関して自分にできることを考えたら、この形になっていた」

コミュニティ・レストラン  
PIKO POKO 代表 宮村 貴幸さん



小倉北区片野新町の住宅街の一角に、『PIKO POKO』はある。店内に入ると、奥側の広いスペースに子どもが遊べるフリースペースがあり、お母さんとお子さん2組が楽しそうに遊び、食事をしていた。もともとホテルマンだったオーナーの宮村さんがPIKO POKO始めたのは、平成13年11月。今年で10年目になる。勤めていたホテルの業績

が悪くなり、自分自身の方向性を考えていたころ、宮村さんに初めての子どもが生まれた。地域での子育てボランティア活動にも参加し、福岡県の中で、小倉北区が一番幼児虐待が多い地区と聞いた。「自分の子どもが育つ環境が、虐待が多い地区だと聞いて、自分に何か出来ないのかな。」と考えるようになった。宮村さんの奥さんが育児ストレスを抱えたことも重なり、「最初は子育てボランティアに携わりたいと思っていたんです。だけど、ホテルマンの自分にできることを考えると、飲食しかないと思ってですね、飲食店とボランティアを繋げようと。それで、こういう形になったわけです。」営業時間は11時から15時まで。夜は他の仕事に出かけている。「ずっと開いているというのがお母さん達のことを考えると、大切なことだと思うんですよ。ゆくゆくは、夜も開けて、いつでも入れる状態にしたいなと思っています。」

客層は子どもというキーワードを中心に多岐に渡る。親子連れ、障害を持ったお子さんとお母さん、不妊治療をされている女性、子どもを見たいからと訪れる近所のおじいちゃん、おばあちゃん。土日はお父さんも一緒に家族で訪れる方も多く、お父さんがベビーベッドでおむつをかえたりしている。そんな中、お客さんたちの間で自然に繋がり

ができている。「50代の里親さんも来られて、不妊治療中の女性の相談相手になったりされているんです。」家庭でも地域でもない、『PIKO POKO』という自由なコミュニティがここにはある。

しかし、オープン当初は、お母さんと繋がらなくてはいけないと躍起になり、ボランティアさんにも毎日来てもらおうと思っていた時期もあった。そんなとき、店に入ってくるなり、最初から最後まで子どものことを怒り続けていたお母さんがいた。その様子を見て、お母さんが全然寛いでいないと思っていた。ところがレジで、お母さんに「こんなにゆっくりできたのは初めて。」と言われた。「ここには家はない空間があるんだと気がつき肩の荷が降りたんです。」と優しい笑顔で話す宮村さん。それからは、お母さん方と持ちつ持たれつの関係でいようと思った。自然な宮村さんのお母さん方との関係が、コミュニティを自ら作り上げていく。PIKO POKOのお客さんたちに力を与え続けているのだろう。

宮村さんの活動は、レストラン内だけに留まらない。PIKO POKO CLUBというボランティア組織を作ってレストランの営業活動と一線を画した活動を行っている。下関の梅光学院大学の学生と一緒に月に1回保育施設でかけて、学生が中心になって、絵本読みをしたりしていたこともあ

る。一緒に行きたいという PIKO POKO にくるお母さん方が参加したこともある。

収益に関係なくこの活動を続ける宮村さんの思いを聞いた。「子どもを育てるのは基本的に両親だから、育てる力をつけもらいたいと思います。PIKO POKO は1つのワンステップ。家にいることが多いお母さんが、何となく立ち寄って、他のお母さん達と繋がって、サークルを起こしたり、何かのきっかけにならいいと思います。」

行政への要望を尋ねたところ、「全国にコミュニティレストランは100以上あると言われているんですけど、その中でもうちのような子育て関係は弱いと言われている。お金にならないと。地道な活動をしているところ、NPOなどにも補助がおりる仕組みができればいいなとは思います。」

お母さんから夫婦間の問題を相談されたりすることもあるという宮村さん。PIKO POKO のコミュニティが宮村さんを通じて今後広がっていくことが楽しみだ。



コミュニティ・レストラン PIKO POKO  
小倉北区片野新町 2-11-4  
<http://www.pikopoko.com>

子ども連れでも気軽に安心して食事ができる子どものフリースペースを設けたコミュニティ・レストラン

(文・入江 美穂 写真・魚本 藍)

## 「お母さんは家族のキーパーソン」

心理カウンセラー / ココ\*リセセラピー代表

松井美由紀さん



「昔は取材する立場だったんです。」と優しい笑顔で話す松井さんは、東京で女性雑誌の編集・ライターの仕事をしていた。しかし、母親が重度のうつ病を発症し、15年間「うつ病」と向き合ってきた。そんな環境の中、心理カウンセリングを学び始めた。学び始めて、松井さんの中でひとつテーマができた。それは『怒り』の感情についてだった。

きっかけは、自分自身の『怒り』の感情がどうしても処理できない出来事が仕事で起きたこと。うつ病が治りかけ

### ■松井 美由紀

日本メンタルヘルス協会公認心理カウンセラー・ココ\*リセ子育てセラピー代表。個人カウンセリング、企業カウンセリング、教育関連等でのセミナーを行うとともに、お母さんのための子育てセラピーを定期開催。お母さんの心のケアと学びの場を提供している。

<http://www.cocorise.com/>

た母親を最後まで苦しめたのも、姑や親族に対する『怒り』。「どうしてこんなに怒るんだろう。」と母親に対して感じていた松井さんが、自身の中にも同じ『怒り』の要素があることに気づいた。同時期、息子さんがチック症になり、「自分自身が子どもに対しても必要以上に怒っているかもしれない。」と怖くなつたという。本格的に心理カウンセリングを学んだことで、「私自身が180度変わりました。生きるのがすごく楽になったんです。」親子の関係も変わつた。息子さんのチック症は治り、中学生の娘さんからは「昔よく怒つてたよね。」と言われる。会話の絶えない、温かい家庭の様子が目に浮かぶ。

心理カウンセラーとなってから、忘れられない出来事がある。ある小学校に行ったとき、クラスの中で一番気の強そうな女の子が松井さんに駆け寄り、別人のように小さくなつて『私ね、家ですごくすごく怒られるの』とうつむいてつぶやいた。胸がギュッと痛んだ。「強いように見えて何らかの背景がある。私に何ができるだろうと考えるようになった。」「大家族でみんなで子育てしていた昔と違い、今は核家族で、ご主人も帰りが遅く、お母さんと子どもだけという狭い空間で子育てが行われている。迷惑をかけてはいけないという意識も強い。きちんとしなければと、とことん怒って追い詰めてしまう。それが子どもに劣等感を植え付けたり、同じように友達に怒りをぶつけたり・・悪循環になっている気がします。でもお母さんも一生懸命なんです。子どものためを想つての行動。怒り方が分からないお母さん方が増えてきているけど、教えてもらっていないから仕方ないんです。」

学べば怒らなくても子どもに躾ができると言う。「学校で子育てや心の仕組みについて学べる環境が整えば一番」と松井さんは語つた。核家族化が進み、世代間による学びが得られない今、学校が子育てについて教育するというのは一案かもしれない。「子どもの行動には理由がある。怒りにも対処がある。子どもの心と自分の心を知れば、虐待も減る。それをたくさんの女性に伝えたい。」そんな思いから、講座や講演会では「子どもの心を学ぼう」「怒りのコントロール法」等をテーマとして伝え続けている。

松井さんが定期開催している子育てセラピーでは新しい命が誕生している。学んでいくことで、ご主人との関係も改善され、「○人目ができました!」という報告がここ最近重なつた。「少子化対策にも貢献してるでしょ?」と松井さんは嬉しそうに笑う。「お母さんはキーパーソン。お母さんが変わると家族が変わって、時に素敵な奇跡も起きる。自分が育てた子どもとサポートした夫が社会に出たら、それぞれに活躍して社会に貢献してくれる。その貢献の元を作っているのは私たち母親。母親業こそすごい仕事だと思うんです。でも日々、修行です。」と苦笑する。「お母さんだって人間だし、未熟で当然。私自身未熟者。だからこそ、学び、心地良いつながりを作り、成長してゆける場所を見つけることが必要。孤立化、自己責任という枠を取り払い、温かく支え合つていきたい。決して1人で苦しまないで。」同じ想いや経験を持つ松井さんだからこそ言える力強いメッセージを頂いた。

(文・入江 美穂 写真・魚本 藍)

## 訓練を通じて人とのふれあい、関係を大切に

親子訓練 ミツバチの会

元会長 小樋 ゆかさん 副会長 福井多恵子さん 事業担当 泉原 晶子さん



『親子訓練 ミツバチの会』では、障害を抱えた子どもとその家族が、動作法というリハビリを通して自立や社会参加につなげていくための訓練や学習を行つてゐる。平成14年11月に発足し、現在会員22名。会員を支えるのは家族だけではない。子どもたちに動作法や支援を行つてゐる『ミツバチサポートクラブ』は、臨床心理士や特別支援学校の

### ■親子訓練 ミツバチの会

八幡西区を拠点に活動中。障害を抱えた子どもたちとその保護者が、自立や社会参加に繋げていくための訓練や学習を行つてゐる。

教諭などスーパーバイザーと呼ばれる専門職ボランティアの方。発足当初から支援している小倉北特別支援学校の樋口先生の呼びかけもあって、地域の方や学生たちとともにミツバチの会を支えている。取材当日も、子ども達がそれぞれマットを広げて、お母さんやスーパーバイザーの方と1対1で訓練を行っていた。訓練というと汗をかいて必死にというイメージだが、そうではない。見た目にはストレッチ運動が一番イメージに近い。ミツバチの会監修の動作法マニュアルにはこう記されている。『動作法を通して、自分の身体に気づき、力の入れ方や動かし方が分かる。動作を通して、相手の意図を理解して解決していく過程を相手と一緒に体験し、共有する。自分に伝えられた相手の意図を理解して解決していく過程を通して「学び方」を獲得する。それらを通して自律する力（自己コントロール）を少しづつ学ぶ』と。言葉にすると難しくなってしまうが、訓練の風景は、子ども達もそして大人も本当に生き生きとしていた。

発足時から会員の小樋さんは「学校とは違う人たちのつながりができる、同じ悩み、思いを持つお母さんたちとも話ができることがいい。私も子どももミツバチに来るのが楽しみなんです。」と話す。「子ども同士もいい刺激になっています。」（泉原さん）。「特別支援学級や通常学級に通っている子どもたちには、周りと自分が違う、どうして自分だけ注意されるのだろう、だけど誰にもそんな悩みを言えなかったりする。ここは同じ悩みを共有できる場なんです。学校だけじゃないつながりを持つということは子ども達にとっても私達親にとっても大切なことだと思います。そういう場所がたくさんできていけばいいなと思います。」と副会長の福井さん。

隣の部屋では、会員のきょうだい達が、地域のボランティアの方と一緒に活動していた。泉原さんは言う。「下の子が幼稚園のときに、もしもお父さんお母さんが死んだら、お姉ちゃんの面倒は私が見ないといけないの？」と聞かれたんです。ショックでした。面倒をみてもらっているつもりはなかったんですが、色々我慢させたり、まだ小さいのに彼

女なりに色々と考えているんだなあと。その話をミツバチでしたら、いつもお兄ちゃんばかりと言われるとか我慢させてるよねという声が多く聞かれました。そこで『きょうだい支援事業』を始めたんです。」「きょうだい支援事業」が始まる前までは、ミツバチに行くときには、きょうだいの子は家でお留守番だったり、他のところに預けてきていたりしていた。今では、地域のボランティアの方の協力も得て、きょうだい自身の活動ができるようになった。動作法の訓練が終わると、近くのコンビニにみんなでお買い物に行く。「お買い物リストから何を買うか決めてから出かけます。戻ってきたら、何を買ったか記録するんです。」これも社会生活へつなげていく為の訓練の一つになっている。「お買い物に行くよ」というと、子どもたちは本当に嬉しそうに準備を始めた。子ども同士で手をつないで歩いていく姿に「みんな本当にできるようになった。昔はがちゃがちゃだったんですよ。」とミツバチサポートクラブ代表の樋口先生。「今日は何を買うの？」と笑顔で迷っている子どもの横に寄り添っていた。

「ミツバチの会が発足してもう8年になります。会が活動を続けることができているのは、ミツバチサポートクラブの先生方をはじめ、たくさんのボランティアさんたちのおかげなんです。」と泉原さんは言う。「夏のデイキャンプのときには、大学生もトレーナーとしてたくさん参加してくれている。活動場所である市民センターさんをはじめ、地域の方々、たくさんの方々の支えがあったからこそ、ここまで続けることができている。感謝の気持ちでいっぱいです。」ボランティアの輪は自然に広がっていったという。子ども達、きょうだい、親、そしてボランティアの方々とのつながり。コミュニケーションが希薄だと言われる今日の社会の中で、ミツバチの会では世代や職業を超えて多くの方々のあたたかい心が触れ合っている。ミツバチの会の子どもたちの生き生きとした表情をみて、人と人との交わりがどれだけ子育てに大切か、改めて感じた。

（文・入江 美穂 写真・魚本 藍）

## 編 集 後 記

今回の取材をさせていただき、それぞれ内容も場所も違う活動をされているが、子どもに対する思いの中で多くの共通点があることにはっとさせられた。近頃の子どもたちは大人数で話を聞くことが難しくなっていること、お母さん自身が充実した生活を送ることがいい子育てにつながること。そして、皆さん自分自身の子どもだけでなく、「他人」の子どもの子育てに大いに携わっていた。地域の子どもは地域で育てる、子育ては地域全体で支える。核家族化がすすみ、隣人とのつながりが薄れていく今日の中でも、北九州市にはこんなにも多くの素晴らしい熱い想いを持った方々がいることに感動し、たくさんの方に知ってもらいたいと強く感じた取材だった。

ドンナ・マンマ編集部